

Title	目の力
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 5 p.89-p.96
Issue Date	1991-07-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79533">https://hdl.handle.net/11094/79533</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 目　　の　　力

井　本　英　一

イランでは、おそらく中近東全域にわたってもそうであるが、人や物をほめるとき、あとのことを考えて、慎重にならざるをえない。例えば、イラン人の家を訪問した客が、その家の子どもを、何の前置きもなくほめて、客が帰ったあと、その子が病気になろうものなら、子どもの病気の原因は客の目にあったとされる。

イランでは、人や物を見る目つきや視線のことを「ナザル」といい、視線を投げかけられた人や物が、大きな損害を受ける場合があると考えられている。迷信深いイラン人は、人間の病気や死は、自然のものではなく、多くはこのような「ナザル」の犠牲によるものだと考えている。これはイランだけでなく、ヨーロッパ人のなかにもこのように考える人があるようである。このような目つきは、邪視といい、邪視は家を空にして、墓を満たすといわれている。このような「ナザル」は、それではどんな人がもっているのだろうか。それは、見知らぬ人や、巨人など、身体的な特徴を持った人がこの種のナザルをもつと考えられているようである。別の世界では美しいとされるグリーンやブルーの瞳をもった人は邪視を持つとされる。このような特徴がなくても、他人から邪視をもっているのではないかと自分が疑われているのではないかと、気をかけなければならないことがある、といわれる。

人や物をほめるときは、前置きのことばが必要である。それは「マーシャッラー」ということばで、「アラーの神が欲したもうたもの」という意味である。このことばは、「すてき」という意味に転じる。ほめる相手がこの前置きをいうと、アラーの被造物と認めているので、嫉妬される心配はなくなると人々は考えるようである。つまり、至高神アラーがおつくりになったといえ、いう方にも、いわれる方にも何の緊張もないようである。この前置きをいうことによって、相手が第三者の邪視からも守られますようにという願いもこめられている。

人間は、不快と思う人や物に目を向けると、その対象に影響を及ぼすと考えられたようである。この場合、相手が良すぎて不快に思うことが強調される。つまり、相手が自分と同じレベルか以下になることによって、自分が同等あるいは上位に立てるという願望が、その人の目に出るというのである。一種の嫉視で、日本での日常会話で「うらやましいわ」というのとは違って、もう少し深刻である。このような嫉視ばかりでなく、ただ大きい目であったり、はっきりした目も、何らかの悪影響を及ぼすとされるようである。孔雀の羽についている丸い紋様は、目ではないがタブー視されるようである。バッタの目や兎の目は、大きいというだけで、不幸のシンボルとさ

れた。日本ではイタチの道切りといって、地方により、いろいろの意味が付されているが、16世紀のデンマークの天文学者ティゴ・ブラーエは、兎が道を横切ると、引き返したといわれている（ヘースチングズ編『宗教・倫理学百科辞典』第5巻、610頁）。

イランで生活していると、相手との間で共通の話題になっている物を「あなたの物です」とよくいう。例えば、イラン人の家に招かれると、「この家はあなたのものです」といきなりいわれて面食らう。はじめは、このいいまわしが、イラン特有のタアーロフというあいさつかと思う。たしかに、今は単なるあいさつに化してしまったかも知れないが、その起源はあいさつではなかったようである。現在でもしばしば見聞するところであるが、イランではほめられた物を、ほめた人に与える風習がある。私の経験を記させていただこう。1972年ごろ、広島大学の故松崎寿和先生や潮見浩教授の一行と、イラン東北部のゴルガン地方の発掘に同行させていただいたとき、ゴルガンの教育委員会に発掘の挨拶に行った。たまたま、オフィスの長のいられる部屋に、地方色ゆたかなラグ（中型のじゅうたん）が敷いてあった。私は、うっかり、前置きなしに、じゅうたんをはめてしまった。館長にあたる方は、明らかに当惑した顔つきをして落ち着かない様子であったが、私たち一行の中にいたテヘランの考古博物館のイラン人職員を呼び寄せて、何かひそひそと相談していたが、話がついたようで、私は館長さんにご迷惑をかけなくて済んだ。これが物だからまだよいので、相手が人間だったら大変である。「外人さん」だからと、大目に見てはもらえらるだろうが、とにかく大変である。亡くなった足利惇氏先生から、ご自身のイランでの経験をお聞きした時、イラン人の奥さんをきれいだとほめたらだめだとおっしゃっていたのを思い出す。イランの女性にかぎらず、多くの文化で、女性がヴェールを常用するが、このヴェールは他人の邪視を避けるためというのが、その大きな目的であるに違いない。イスラム教は、偶像をつくるのを禁止する宗教である。といっても、イランにはシーア派の開祖であるアリーの絵があちこちに見られるし、ホメイニー師の写真は街中に溢れている。しかし、等身大の彫刻となると、革命以前は、前王朝のシャーや初代のレザー・シャーなどの像はあったが、アリーやマホメットやホセインの像は皆無であった。宗教画では、マホメットやアリーらの顔は、目・口・鼻・耳がなく、顔面は白一色である。このことに関してすぐに思い出すのは、イスラム時代以前のササン朝やアケメネス朝の岩面の浮き彫りや、中央アジアの仏教芸術の彫刻・絵画の顔の部分に毀損しているものがあることだ。これらの例から見ると、目の力が及ぼす影響は、単に異常な、あるいは悪い人によるだけでなく、聖者によっても甚大なものがあると考えられていたことが分かるのである。これらの聖者のもつ邪視は嫉妬から出た邪視ではなく、目もっているエネルギーであった。近世のイスラム教徒だけが、遺跡の像の顔面破壊をしたのではない。八世紀の末から九世紀の初めにかけて、現在のイラクのクーファやバグダードで活躍したイブン・アル・カルビーの『偶像の書』（池田修訳、深井晋司編『西アジア史研究』東京大学出版会、1974年所収）によると、神の使徒マホメットがメッカ征服の日、カアバに姿をあらわしたときは、偶像はカアバのまわりにたてられたままであった。彼らは弓の先端で偶像の目や顔を突きながらいった。「真理は現われた。

虚偽は消滅した。虚偽はかならず消滅する」(『コーラン』17・81)。偶像は倒され、拝所からもち出され、焼かれた(183頁)。この記事によっても分かるように、マホメットのように力のある神の使徒でさえ、異教の神の偶像の目から出るエネルギーを怖れたのであった。

イランでも、古代ゾロアスター教時代から邪視に対する怖れがあり、それに関することばがあった。ゾロアスター教の聖書『アヴェスタ』には、「息子」「頭」「目」「食う」を表わすことばに二系列のことばがあり、一方の系列のことばは、至高神アフラ・マズダの信者に対して用いられることばであり、他の系列のことばは、非ゾロアスター教徒に対して用いられることばであった。目の場合、ゾロアスター教徒に属するものは「ドーイスラ」といったが、非ゾロアスター教徒のものは「アシ」といった。興味があるのは、これら二系列の殆どのことばには、サンスクリット語の対応語があることである。インド人とイラン人が両派に分裂した時代には、たがいに反対系列のことばを重視したり軽視したりしていた。古代イランでは、邪視・邪眼のことを「アガシ」といったが、「悪い目」を意味した。中世のササン朝の言語であるパハラヴィー語にも、邪視を表わすことばがいくつかある。「ソール・チャシュミーフ」「ドゥシュチャシュム」「チャシュム・アレシュキーフ」などがそれであるが、そのまま近世ペルシア語に受け継がれた。邪視の観念は、このように、大昔からあったことが分かる。

邪視が現実、どんな力をもっているのか、具体的な例をあげておこう。イランの聖都メシェッドで医療に従事した英人ベス・A・ドナルドソンが、メシェッドに巡礼に来たイラン各地の女性から集めた信仰と習俗が『ザ・ワイルド・ルー』(ロンドン、1938年)に収めてある。一人の女性が公衆浴場に行く途中、町内の隣人の羊を見て、冗談半分に「私がお風呂から帰ってくるまでに、この羊でスープをつくっておいて下さい。お相伴させていただくわ」。彼女は笑い声を上げながら通り過ぎた。彼女が去ってから間もなく、羊は餌をはんでいるうちに、大鎌の刃に首をひっかけて、出血多量で死んでしまった。いつもと同じように何時間かを風呂屋で過ごしたあと、彼女が家に帰ると、スープの分け前が届いていた(16頁)。この女性は、邪視をもつとして人々から怖れられた。別の話を引用しておこう。メシェッドに一人の商店主がいた。あるとき、駱駝のキャラバンが店の前を通った。商店主は小僧に、これこれしかじかの駱駝の肉を買ってくるようにと銭を渡した。駱駝は特定してあった。隊商が市門のそばで荷物を下している最中、例の駱駝が倒れて死んだ。小僧は大急ぎで走って行き、その駱駝の肉を買った。駱駝曳きは小僧に、誰が肉を買いにこさせたのか。その人の所へ連れて行って欲しいと頼んだ。小僧は商店主の所へ駱駝曳きを案内した。駱駝曳きは商店主を見るやいなや「目が飛び出せ」と叫んだ。すると、商店主の両目は、眼窩から飛び出して地上に落ちた。明らかに、駱駝曳きの邪視の方が、商店主のそれよりは強かったのである(17頁)。このように邪視の持ち主は、相手の動物を殺してしまう力をもつ。しかし、それ以上の力をもつ者にかかると、自分の目が外に飛び出してしまう。イラン人は、つねにこのような邪視にさらされているわけであるが、邪視もちの人を発見する方法も考え出した。卵の両端にいちばん小額の硬貨を当てて力を加えてはさみ、怪しいと思う人々の名前を

順々に唱えてゆく。指の圧力で卵が割れた瞬間に唱えた名前の人が、邪視を行使したと信じられている。近東から中央アジアにかけて、さらに興味のある信仰がある。瞳が二重円になっているひとは、邪視をもつとされる。ところが、中国の『淮南子』脩務訓には、「舜に二瞳子あり。これを重明子という」とあり、聖人の特徴とする。また、左右の眉毛が連なった人も危険視される。この事実は、のちに述べる邪視除けに利用され、女性はこのように化粧して、他人の邪視をはね返すのである。

ギリシア神話のゴルゴン三姉妹のうち、メドゥーサのみが不死ではなく、そのためにペルセウスに首を切られて殺される。ゴルゴン・メドゥーサの伝承によると、彼女らに見られた者はみな石に化した。ペルセウスはメドゥーサの顔をまともに見ず、うしろ向きになり、青銅の楯に彼女の姿を映して彼女の首を切った。しかも、ペルセウスは、それを被ると姿が見えなくなる帽子を被り、有翼のサンダルをはき、キビシスという袋をもって、さらにはヘルメスに与えられた金剛の鎌をもってメドゥーサを殺し、その首を袋に入れ、怪物退治をしたが、最後にサンダルと袋と帽子をニンフに返し、首はアテナ女神に捧げた。女神はそれを自分の楯の中央につけた。メドゥーサはポセイドンとアテナの神殿で交わったといわれる。ペルセウスに首を切られたとき、その傷口からペガソスと、生まれたときから手に黄金の剣を持って振り回していたクリュサオルが生まれた。

ゴルゴン・メドゥーサの恐ろしい目は、楯にとりつけると敵を防御するまじないとなった。また、ゴルゴンの面（ゴルゴネイオン）は、パウサニアスの『ギリシア記』（J・Gフレイザー訳）によると、アルゴスのアゴラ（市や集会場になる広場）に埋めてあったという（2・21・5）。この世とあの世の境とされたこのような広場に首を埋める風習は広く見られるが、このような首は、神への供物であると同時に厄除けの役を果たしたであろう。これらの護符としての首は、祭壇とされる石の下に埋められたと考えられる。ゴルゴン・メドゥーサに見られると石に化したという伝承は、祭壇の自然石と首とがセットになっていた時代の名残と考えられないこともない。イスラム教徒の聖地であるメッカのカアバ神殿の中で交会した男女が、神の怒りに触れて石に変えられたという伝承がある。メドゥーサとポセイドンはアテナの神殿で交わったが、石に変えられることはなかった。かえって、メドゥーサは人を石に変え、自分は石にならなかった。上述したイブン・アル・カルビーの『偶像の書』によると、昔、イエメンからイサーフとナーイラという男女がメッカに巡礼に来て、カアバ神殿の中で交わったため、二人は石に変えられ、ザムザム井の前に置かれ、偶像として崇拝された。のちに、これらの像は、サファールの丘とマルワの丘の上にそれぞれ置かれたという。この伝承から、異教時代の神殿内あるいは神殿外における石の祭壇上での人間の供儀を想定することができる。アラスカ西部にいるトリンギット・インディアンの間では、初潮のあった女性は、小屋あるいは簾の中に隔離された。彼女は周囲にフラップの下がった帽子を被って空を見て太陽を汚さないようにした。彼女の視線は見るものを石にすると信じられた（J・G・フレイザー『美男・バルドル』第一巻、ロンドン、1913年45-46頁）。ここ

では、初潮を見た女子の目と石との関係が見られる。実証は困難かも知れないが、このような女子が初めて男子と交わるか、石の祭壇の上で、初物として供儀された時代の名残かも知れない。メドゥーサの場合も同じで、メドゥーサは初潮を見た女子で、豊饒のシンボルとされ、供儀されたと考えられる。メドゥーサは大地母神であったと解釈されているが、妥当な解釈であると思う。穀霊としての幼い童神を毎年殺す習俗と共に、古くは、地母神をも殺す習俗が存在したと考えられるからである。インドネシアのセラム島の文化にも、このギリシア神話と似た、女神の首を切る儀礼がある。これは単なる首狩り族の首狩りではなく、豊饒を前提とする儀礼と考えられる。殺害もギリシア神話と同じように鎌を用いる（A・E・イエンゼン著・大林太良他訳『殺された女神』弘文堂、昭和52年、117-118頁）。

女神が殺されて、新しい豊饒の女神が再生する儀礼に、目の信仰が加わったと考えられる。ゴルゴン・メドゥーサの神話とその解釈は松村武雄『希臘神話の新検討』（培風館、昭和28年、337-358頁）の「ゴルゴン神話と仮面儀礼」に見られるので参照されたい。善き者であれ、悪しき者であれ、あるいは動物であれ、その視線には、ある種の破壊的な力が宿するという、抜きがたい信念があったことは疑いない事実である。人間の不幸は、人または動物に見られたため、ことに長患いで死ぬのは邪視によるためと信じられたようである。肺結核や癌のような病気はことにそうであったと思われる。社会の不平等の差が大きくなると、嫉妬の要素も加わる。

釈尊が成道しようとしているとき、魔類のある者は、火と燃える目を彼に据えて、毒蛇のように睨みすえる火でもって彼を焼き滅ぼそうとしたが、そこに座っている尊者が見えなくなってしまった（『ブッダ・チャリタ』原実訳、中央公論社、昭和49年、第13章）。ここにいう意味は、魔の邪視よりは釈尊の目の力の方が強力なので、魔の目には釈尊の姿が見えなくなったというのである。世界的に見て、初潮の女子の持つ視力に破壊力があることはいくつかの例がある。その後の女性の月経も同じようにタブー視される。紀元前2世紀のインドの法典である『マヌの法典』（田辺繁子訳、岩波書店、1953年）によると、月経中の女性に近づいた者の知力、体力、視力及び寿命は失われる。このように、汚れに満ちた彼女を避けるときは、これらの力は増大する（4・41-42）。視力が弱るとか増大するというのは、現実の弱視、近視、遠視などではなく、破壊力のある、ときには邪視にもなり、それを防御することもできる視力を指している。獵師や漁師が、ことに月経中の女性に近づくのを忌むのは、動物の知力、体力、視力に遅れをとらないためと考えられる。男性たちのもっているこれらの力が、月経中の女性のもった威力に吸い取られてしまうからであろう。古代日本語ふうにいえば、これらの女性は、面勝ち、目勝つ女性である。同法典には、同じ個所に妊娠中の女性を注視するとか、水に映る太陽や自分の姿を注視するとある。これらも、それぞれ威力をもった目と関係があると考えられる。千手観音の手の掌には目があるので、千手千眼となるが、千の目は千倍の目の力で影響を及ぼすばかりでなく、千倍の防御力をもつことにもなる。インドの神の千眼の起源について、南方熊楠は『魔羅考』について」（『南方熊楠全集』5、平凡社、昭和17年）の中で次のように論じている。帝釈天がその師であ

る瞿曇（ガウタマ）の不在中、その妻を犯し、雲雨の交わりをした。そこへ師が帰ってきて、妻を石に化し、帝釈を去勢し、その体に千の女陰相を生ぜしめた。のち、諸神はこれを憐れみ、水に浸して陰相を眼に変じたので、帝釈を千眼と名付け、無智の輩は千眼を一切智の表示と心得おる。今も、インドの帝釈像の顔から首、両手まで、眼とも陰形とも見えるものを描いてある。日本の仏像でも、額に縦に割れた眼がついているのがあるが、これは陰相で魔除けになる（86頁）。ここでも、ガウタマの妻がタブーの性交をして石に化すモチーフが見られる。これも、ある種の交合のあと、豊饒の本源である女性を石の祭壇の上で供犠した名残が説話化して伝えられたのであろう。師の妻と交わった者への罰として、『マヌの法典』に同じようなものが見られるから、この習慣も古いものと考えられ、男性を寸断した名残かも知れないのである。中国の神像にも三目のものがある。敦崇の『燕京歳時記』（小野勝年訳、平凡社、昭和42年）によると、6月23日の馬王祭に祭る神像は、訳者の註のいうように、紅面多鬚三目で、一目は額に縦に表わされている（130頁）。おそらく、この縦の目も、辟邪に関する陰形であり、同時に目であったと考えられる。なお、6月24日は、古い新年祭とも考えられる関帝祭である（131―132頁）。馬王祭は除夕の祭ということになるが、通過の時点でこのような魔除けが見られるのは興味深い。

昭和62年4月19日、神戸市立博物館で、兵庫オリエント協会の第1回のセミナーがあり、三笠宮名誉会長と陳舜臣氏の講演があった。翌20日、殿下は神戸市の山手に点在する関帝廟、イスラム教会、ユダヤ教会、ジャイナ教会をお廻りになったが、関帝廟の本殿の前庭の中央に香炉が安置され、向かって右には紙銭、紙馬、紙衣などを焼いて死者の国に送る八角炉があり、左には八角形の亭が見られた。ユーラシアに広く見られるこれらの表象を目の前にして私は深い感銘を受けた。

古代中国では門に目を吊るす習慣があった。『史記』伍子胥列伝にいう。伍子胥はもと楚に仕えていたが、父と兄を楚王に謀殺されたので、逃れて呉王に仕えた。のち楚を討ち、楚の平王の墓を暴いて屍体に鞭打った。その後、呉王夫差は越王勾踐を破ったが、伍子胥の忠告をいれなくて、勾踐を殺さなかった。さらに宰相のざん言にあって、呉王夫差から死を賜った。伍子胥は死にのぞんでいった。「わが墓の上に梓を植えよ。呉王の棺材にするためだ。わが目をえぐって呉の東門にかけよ。越が呉を滅すのを見てやろう」と。これを聞いた夫差は怒って、子胥の屍体を墓から引き出して、馬の皮の袋に入れて揚子江に投げ込んだ。白川静『中国古代の文化』（講談社、昭和54年）によると、刑罰者の目をえぐって門に懸けるのは、たぶん邪眼・呪眼としてその呪能を用いるためであろうという（119頁）。白川静『中国古代の民俗』（講談社、昭和55年）によると、春秋時代、山西の狄種である長狄裔如<sup>ちやうてききやうじょ</sup>が捕らえられて魯の城門に、その弟の榮如が斉の周首の北門に、その首が埋められたが、それはいずれも、勝者の神聖を守るために、敗者の呪能を用いたのである（205頁）。同じような例が古代イランでも見られる。ダリウス大王のベヒスタン碑文（2・73―6）によると、ダリウスは、メディアの王を称したフラウルティと戦って彼を捕らえ、鼻と両耳と舌を削ぎおとし、彼の一眼をえぐった。彼は王宮の門に縛りつけられ、すべ

ての民が彼を見た。そののち、ダリウスはエクパタナで彼を杭刺しにした（伊藤義教『古代ペルシア』岩波書店、昭和49年、33頁）。ダリウス大王は、フラウルティの片目をえぐったといわれているが、その目は捨てたのではなく、護符として使ったのだと考えられる。門に縛りつけられた死体は一眼で、鼻と両耳を削ぎ落され、さらには舌を切られてのっぺらぼうにされているのが注目になる。イスラム教徒が、遺跡の人物浮き彫りの顔を削り取るとは上述したとおりであるが、このことと通底する習俗・信仰であると思う。なぜ両目をえぐらなかったのか、その理由を知りたいところであるが、日本のいけにえに供される魚が片目であるという伝承を参考にと、供儀される人間は片目にされて聖化されたのだと考えられそうである。

古代中国の戦争では、敵方に対して、目のふちに文身をした媚人三千人に、圧服の呪的儀礼を行なわせた。陣頭にあって軍鼓をうつのも、媚とよばれる巫女であった。敗軍の巫はまず殺されるが、輕蔑の蔑の字がそれである（白川静『中国の神話』中央公論社、昭和50年、36頁）。軍の先頭に巫女が立つ習慣は、朝鮮の新羅の花郎の前身である源花のことを想起させる。源花は花郎と違って女性で、化粧して一団の男性の先頭に立った。源花の制度はすぐに、男性の花郎にとって代わられたが、字が示すように、初期の花郎は美しく化粧したと考えられる。目の力への信仰があったはずであるので、媚人と同じように、圧服の呪的な力の所有者と思われたに違いない。平時は源花や花郎を先頭に立て、数百人の郎党がそれに従って山遊びや野遊びをした。白川静『字統』（平凡社、1984年）の「媚」の項によると蔑は媚女を殺す形で、敵の呪術者を殺すことによって、敵の呪的な能力を奪うことができると考えられた。媚とは美しき魔女で、媚態・媚辭はすべて魔女的な行為である（719頁）。

日本にも例がある。天孫降臨のさい、先遣の者が帰ってきていうのに、一柱の神が天の八ちまたにいて、その目は八咫鏡のようで、赤いほおずきそっくりですと。神々が行って尋ねたが、相手の目の力が勝っていて尋ねることができない。そこで天照大神は天鈿女にみことのりして「汝は眼力が勝れた者だから、行って尋ねよ」といった。鈿女は乳房を露出し、裳帯をへその下におろして猿田彦大神というこの神の前に立った。かくて、天鈿女の目の力が勝り猿田彦は天孫を道案内して高千穂峯にゆくことになった（『日本書紀』神代下第9段）。天鈿女は、女陰を出して、猿田彦の邪視をはね返し、彼を圧服する。『古事記』によると、神武天皇にヒメタタリスケヨリヒメを仲介した大久米命は、iskeヨリ姫のもとに天皇のご意向を伝えたとき、目に入れ墨をして鋭い目つきをしていたが、姫に、どうしてこのような入れ墨をした目をしているのですか、と問われ、姫にお会いするために、目に入れ墨をしています、と答えたので、姫はお仕えしましょうといった。そこで天皇は姫のもとにゆかれ一夜婚をされた（中巻、神武天皇条）。久米命の「<sup>く</sup>黥ける<sup>と</sup>利目」という習俗は、古代中国の媚の中に見られるばかりでなく、徳、省、童、瞳などの字の中にも見られる（白川『字統』の該当文字の項を参照）。神の御子であったiskeヨリ姫も、メドゥーサ的な威力のある目をもっていたと思われるが、久米命の目に圧せられて、天皇の仰せを承ったのであった。



## 目 の 力

イーヴル・アイとか邪視と呼ばれるある種の日や目の威力について、いくつかの例をあげて見てきた。これらの目は、その威力ゆえに、相手の目に勝るときは邪視除けになる。この項を叙述する間にも、2、3の例をあげた。毒をもって毒を制する邪視除けについては、次に述べることにする。(つづく)

(1991. 5. 14 受理)